

作家コンラッドと「ガスパール・ルイス」

秋 葉 敏 夫

職業作家として文筆だけで生計を立てることのできる者が、例えば20世紀前半までのイギリスで、どのくらいいたのだろうか。これには時代背景、居住地、生活水準、その他を考えねばならず、その間いかけはいかにも漠然としているが、数は限られ、けっして多くないことだけは確かである。事実、およそ18世紀に文壇が確立され、供給がある程度満たされても、文学愛好者は概して暇を持って余す女性や子供が中心だった。経済的にいえば、需要が供給を上回らなければ、供給側が苦しむのは当然である。作家のなかには、時代の風潮、読者の興味、その他を重視し、いわゆる流行作家の道をたどる者も出れば、あくまでそれらに妥協せず孤高を持する者もいる。文学的才能は当然必要だが、評価と人気の一致しないのは世間の常であり、それに自分自身の運、不運も手伝って、作家稼業の困難さが並のものでないのは容易に推測できる。裕福で金をかせぐ必要がないとか、正規の職業を別に持っていて、文筆に向かった人々が少なくないのは、その間の事情をよく物語るものだろう。

この小論で扱うジョウゼフ・コンラッド(1857~1924)も、作家稼業の厳しさを嫌というほど味わわざるを得なかった人間である。彼が一般読者の心を捕えるのは、実に、処女作『オールメイヤーの阿房宮』(Almayer's Folly, 1895)出版後18年を経過しており、彼の作家生活ではすでに後期の創作上の衰退期に入ってからである。コンラッドの場合、作家生活以前に、彼はほぼ20年に近い船乗り生活を送っており、その時はまだ独身だった。ところが、結婚し、子供も生まれようとしてくると、彼も確かな収入源を考えざるを得なくなる。コンラッドはすでに船長の

資格を持っていたが、彼は生粋のポーランド人であり、外国人の彼に、そうやすやすと船乗りの働き口は見つからない。当時の船乗り稼業は1航海ごとの契約が普通で、これもけっして安定した収入源ではなかった。ただし、初期の作家生活の合い間に、つまり数冊の長編小説と短編小説をいくつかすでに発表した頃でも、彼が船長の職を探しているのは、それだけ彼の作品が売れていなかったという理由によるところが大きい。事実、その頃の彼の小説は書評家たちには比較的好評でも、一般読者の心はほとんど捕えていないのである。コンラッドはもはや地に根を下ろす生活者であり、一家の主として糊口の問題がその両肩に重くのしかかってくる。例えば1900年5月の手紙のなかで、彼は次のように、その苦しみを告白する。

……私は縁故がないし、力もなければ資産もない人間です。毎日の暮らし方が私にとっては心配の種なのです。いったい私に何ができるでしょうか。私はすでに2つの出版社に借金があり、仕事はなかなかかどらず、それに少しでも助けになるような知り合いは1人もいないのです¹¹⁾。

結婚後のコンラッドが、いわゆる芸術家にありがちな、派手で金銭にだらしない生活を送っていたという証言はひとつもない。ただ彼の家系はポーランドのかなり大きな地主であり、それは下層の貴族階級ということになる。彼は16歳で母国をあとにしたが、その青年期で船乗り時代の借金は、後見役の叔父によって結局は処理され、コンラッドが底辺の生活を長く送った経験があるとはそれほど考えられない。ところで、家族を養わなければならなくなった時でも、彼はその出身の誇りから、生活を切り詰め、その水準を下げることは簡単にできなかったらしい。彼はそういうことに苦心するよりも、収入の手立てがなければ徐々に、

自分の未完成の原稿を頼りに借金を重ねていくのである。そしてそれは、確かな収入と比較して、「節度ある借金」の範囲をかなり越えることになったらしいのだが、このように借り続ける必要性から解放されるまで、作家コンラッドはまだ10年以上も悪戦苦闘しなければならない。

コンラッドの作品が書評家たちにはずいぶん好評でも、一般読者の間では、なぜ人気が出なかったのか。この問いかけに対し、たとえ明確な解答は得られないにせよ、いくつかの理由を推測することは可能だろう。つまり、彼の作品舞台の多くが沖合に出た船上や、東洋、アフリカ、南アメリカなどの異国で、扱う題材も男性の行動が中心であり、主題が人間悪や裏切りや政治世界の残虐さといった暗い、悲劇的な要素が濃い点などをあげても、それほど大きな間違いではない。それにまた、彼の英語の読み難さ、外国人特有の回りくどい表現と難解な言葉の選択なども、彼を敬遠する理由に追け加えてよいだろうか。やや大ざっぱない方だが、コンラッドの文学的資質は、いわゆる流行作家になるための条件から、まったく掛け離れていたのである。そして自分自身そのことを意識しており、借金返済に追いかける彼は、例えば時代の流行とか当世風の衝撃的事件や男女の恋愛といった読者の興味に留意して筆を進めたりする。とくに後者の男女の恋愛は、結果的に彼の得意な分野ではなく、彼の真価が問われる舞台にそれが持ち込まれると、なにか奇妙な違和感を生み出してしまう。コンラッドは長編小説以外に、およそ30編の短編、中編の小説を書き残しており、それらの質的な出来、不出来の差が意外と大きい作家である。その理由を考えてみると、出来のよい作品はほとんど彼の実体験に基づいていて、その物語の迫真性に説得力があり、主題も扱われる出来事とたくみに調和している。ところが、いわゆる出来の悪い作品は、ただ読者の興味に迎合した結果と思われるものが多い。そこでは、例えば短編小説本来の目的、省略と凝縮による単一効果の達成が意図されるわけではない。扱われるのはただ興味本位の物語、つま

りものごとの異常さ、珍しさなどと、人間のしばしば誇張された情緒的
反応で、主題の提示もいささか便宜的にならざるを得ず、少しも印象的
な成果をあげてこない。そして、ここに取り上げるやや長い短編「ガス
パール・ルイス」(‘Gaspar Ruiz’, 1906)も、それらの点で、けっして例
外ではない。

コンラッドの作家生活は約25年におよび、その間に彼は、小説として
は、数え方にもよるが少なくとも15編の長編と、7冊の短編集を書き残
している。そしてそれらの短編集に収録されたほぼ30編の作品は、2作
を除き、最初はどれも雑誌に掲載されている。また、7冊の短編集のう
ち、1つは人間の3つの世代、青春期、成年期、老年期を扱う3編の物
語から出来ていて、その編さんは意図的なものと考えられる。しかし他
の6冊は、収録作品の間に、例えば連鎖小説といわれるような、登場人
物や舞台の一致、あるいは主題の共通性などは見られず、それぞれ、製
作時期の近い作品が集められたものにすぎない。「ガスパール・ルイス」
はコンラッド4番目の短編集『作品6つ』(A Set of Six, 1908)に収め
られたが、その「作者の覚え書」で、いわば彼は自分の短編集の性格を
端的に説明している。

この書物に集めた6編の物語は、およそ3、4年間にわたって、暇
をとらえては執筆に専念したことの成果です。その執筆の時期は掛け
離れており、物語の典拠も様々です。……どの物語でも、描かれる事
柄はまったく本当のことです。つまり、それらはただ単に起こり得る
というだけでなく、実際に起こったことなのです⁽²⁾。

ところで、「ガスパール・ルイス」は単語数19,000弱の、中編小説といっ
てよい作品である。これは作家自身の実体験のドラマ化ではなく、執筆
のために典拠があって、それがまた「作者の覚え書」で説明される⁽³⁾。

すなわち典拠は2つあり、1つは人間ガスパール・ルイスに関し、1830年代に出版された本で読んだこと、もう1つはビルマにいた友人からの手紙で、「大砲を背中にかついだ紳士」のことを知ったというものである。そしてとくに後者の件について、作家コンラッドは、その話が現実に起こったのであり、彼自身子供時代に読んだ本で、まったく事実を述べるような口調の同じような記述を覚えているので、少なくともその話を信じなければいけないと強調する。ただし、このような現実性の強調は、他の作品についても、多かれ少なかれ、当てはまることだが、物語の核心があまりにも異常な出来事に依存しすぎることの弱みのせいであり、作品の薄さ加減を作家自ら暴露するものとなるだろう。

物語の素材に興味深い肉付けをし、それをすぐれた芸術作品に仕上げるのは、作家の卓越した想像力や、小説技法の効果的な利用によるのである。とくにコンラッドは、小説技法の試みのうえで、先駆的な存在である。いくつか例をあげると、語り手の登場、^{タイム・シフト}時間の逆転、限界状況下の出来事、人物の象徴性や象徴的イメージの援用などとなるが、それらの効果は作品に厚みと奥行きとを与えてくれる。そして作家コンラッドは、ただ長編小説だけでなく、むしろ短、中編小説といわれるものへ、それらの技法をひんばんに持ち込んだ。問題はただ、たとえそれらが利用されても、その巧拙はどうかということである。そのお座りな使用は、いわば便利さだけが利点で、作品の意図を上滑りにし、その価値を少しも高めるものとならない。

「ガスパール・ルイス」は傑作長編『ノストローモ』(Nostromo, 1904)完成後しばらくして着手された。そしてその第1部は雑誌社に拒絶されたので、この作品は一時棚上げとなり、結果的には、1905年の11月に完成している。物語の舞台は、作家コンラッドとしては『ノストローモ』に続く2番目の南アメリカであり、例えばジョスリン・ベインズの言葉を借りれば、この作品は「『ノストローモ』執筆のための読書による副

産物⁴⁾」ということになる。「ガスパール・ルイス」は長編『ノストローモ』のおよそ9分の1の長さだが、これらはともに革命期の政治を扱い、並はずれた体力の人間を中心人物の1人においている。ところで両者の類似点はそこまでで、作品の規模といい、主題の意味深さや達成度といい、両者の間には雲泥の差がある。作家コンラッドは17万語に近い『ノストローモ』完成のため心身ともに疲労困ぱいし、「ガスパール・ルイス」にはかなり気楽に向かった嫌いが無いわけではない。実際、後者に見られる語り手のもっともらしい政治解説は陳腐であり、波らん⁵⁾に富む筋の展開に加え、ものごとの偶然性や感傷性はいわゆる三文小説のそれと少しも変わらない。良かれ悪しかれ、こういう特徴は、ただ一般読者の興味を引くための安価な手段と思われるし、この作品が手っ取り早い金銭かせぎのものであるのを、示す以外の何物でもない。

ここで、物語を簡単にまとめておこう。時代は19世紀の前半と考えてよく、支配者のスペインに対し独立蜂起が盛んな南アメリカの、チリが舞台になっている。主人公のガスパールはありふれた貧農の息子で、従順な性格と頑強な体つきの持主である。その性格ゆえに彼はごく自然に独立軍の兵士として徴集され、またその怪力が牢獄の鉄格子を曲げるというエピソードで、冒頭部に紹介される。彼は政治にはまったく無関心な男で、自分からその動きに参加することはなかったが、徴兵後は、結果的には、それに振り回され、もてあそばれるかたちとなる。戦場で王党派に捕えられ、前線に駆り出されるガスパールは、今度は独立軍に捕まり脱走兵として銃殺刑の運命にある。ところで、その刑は執行されたが、彼は偶然にも致命傷をまぬかれる。そして近くに隠れ住む没落貴族の屋敷に彼は逃れ、そこで娘エルミアの看護を受けて、元気を回復する。まもなくガスパールの生存と隠れ場所がわかり、独立軍の将軍が部下とともに逮捕にやってくるが、その時、偶然にも大地震が起こる。家は崩壊して、その王党派の貴族は死に、鉄腕ガスパールは地震におの

く将軍と、瓦礫のなかから娘エルミニアを救い出す。この将軍救助の栄誉によって、彼から脱走兵の汚名が消えることになった。

このあとガスパールは、そのまま独立軍側につくが、エルミニアに促されて王党派へ鞍替えする。彼は命の恩人としてエルミニアの言いなりであり、彼女の方は、家を零落させた独立軍への復讐のために、彼を利用するかたちとなる。やがてガスパールは、独立政府に反抗するゲリラ部隊の首領として頭角を表わし、政府をひどく悩ます。彼はすでにエルミニアと結婚し、2人の間には子供が生まれている。そしてその大胆な反抗に手を焼く独立政府は奸計を用い、エルミニアと子供を人質にしてしまう。ガスパールは砦にかくまわれる2人の奪還に赴くのである。そこで、この怪力無双の男は、無くなった砲架の代りに自ら大砲を背負い、その大砲発射の際に背骨が折れて、瀕死の状態に陥る。ガスパールは最後に、彼を利用したわけではないエルミニアの、真の愛の言葉を聞いて息絶える。またエルミニアの方も、子供を親切だった兵士に託して、崖から投身自殺をするのである。ものごとは、とくに後半では、メロドラマ的要素の濃い展開になるが、この作品は、結局、最後の締めくくりの言葉を借りて、「自分自身の力、つまり肉体の力、単純な心の力——さらに愛の力！——のために命を落とした、怪力無双の男⁽⁵⁾」の物語といって、少しも的はずれではない。

ただし、ガスパールの人生が政治に巻き込まれ、振り回された者の悲劇であることを忘れてはならない。作家コンラッドの関心は、まさに、そこに置かれていて、ガスパールをあくまで政治と無関係な、田舎農夫の素直な息子に仕立てあげている。だが革命期の混乱のなかで、ものごとの「政治化」の動きが田舎にも及び、革命軍が馬の徴発に来た折に、彼も頑強な身体ゆえに、ごく自然に兵士にされてしまうのである。コンラッドは生粋のポーランド人として、つまり悲惨な政治的運命を背負う小国の出身者として、政治を見つめる眼はすこぶる懐疑的である。例え

ば彼のその視線が、「政治の巨大で残酷な力学^{メカニズム}」におののく恐怖に根差して、被害者側の立場から政治の本質を鋭くとらえていると考えて、異論をさしはさむ余地はほとんどない。作品「ガスパール・ルイス」の次のような処刑の場面に、革命期の政治に関し、作家コンラッドは自己の思いに違いないものを付け加えるのである。

深紅の大海に沈もうとする赤い鮮やかな太陽が、ガスパールの輝やかなしい処刑の立派な目撃者、コルディエラ監獄の巨大な塙を、炎のように燃えて見下ろしていた。しかしその太陽が、概して子供じみているのを別にすれば、やはり不完全にしか理解されない理由のために、アリののような人間たちが殺したり死んだりしていく、ばかげた無意味な試みに忙しい姿を見たはずだった、とは想像できない。だが太陽は、銃殺隊の背中と処刑される人々の顔をくっきりと照らし出していた。すでにひざまずいている者もあれば、立ったままの者もあり、狙いを定めたマスカット銃の銃口から顔を背ける者も数人いた。ガスパール・ルイスは、処刑者すべてのなかでもっともたくましい男だが、まっすぐ立ったまま、その大きなぼさぼさ髪を下げている。彼は夕陽に照らされて少しまぶしかった、そして自分はすでに死んだ人間だと考えていた⁶⁾。

これは銃殺隊の発砲が開始される、一瞬前の描写である。処刑前だというのに、なんと静かな風景だろう。いや、処刑で運命が定まっているからこそ、諦めの気持ちが支配し、それは今までの人生を浄化させる静けさなのだろうか。処刑される人々の姿勢にほとんど動きがなく、また銃殺隊の動きも感じられず、そこでは時間が一瞬停止した、なにか象徴的な場面を見る思いがするだろう。鮮やかな夕陽がすべてを赤く染めていて、その効果がいかにも利いている。そこで流れる量はわずかでも、

この色彩の赤は、そこでは、血液の色を暗示し、それはさらに残虐な殺しを連想させる。この場面はほぼ展開部の初めに出て来るのだが、それはまさに「ガスパール・ルイス」のものごとが凝縮された一瞬といえるのではないか。

おそらく作品「ガスパール・ルイス」の価値そのものを左右する問題が、少なくとも2つあると考えられる。1つは独立戦争についてのお座りな解説で、もう1つは、その見解が作品の主題に結び付くと思われるので、そのドラマ化の巧拙といってよい。そして前者に関しては、政治理解の不正確さや不十分さを非難するのではなく、それがあくまで作家コンラッドの政治認識の1つの特徴だととらえるのが適切だろう。すでに触れたように、それは政治を建設的に見つめることができず、政治の残酷さに接して政治におののく者の、被害者側からの視点である。政治を見つめる眼がそれによって曇る場合があるのは当然で、また他方、それによりもっと研ぎ澄まされることもあるはずである。「ガスパール・ルイス」はやや長い短編にすぎず、結果的に娯楽作品となって、その限界は見えているが、例えば前の引用の、「アリのような人間たちが殺したり死んだりしていく、ばかげた無意味な試みに忙しい姿」という表現には、政治に関して、いわば人間への絶望感に近いものが窺われて、作家コンラッドの立場がいっそう明確になる。

もう1つの重要な問題、ドラマ化の巧拙について考えよう。「ガスパール・ルイス」の物語は、語り手、サンティエラ將軍によって進められる。彼は物語のなかにも登場して、作家自身の言葉を借りれば、「物語全体の性格を決定し、彼の助けなしでは達成できたかどうか疑わしい、1つの現実感をそれに与えている¹⁷⁾」人物である。つまり、物語が語り手の体験談として進められ、そこに醸し出される物語の現実感が重視されたわけらしい。これはいわゆる語り手使用の大きな利点であり、それはそれとして理解できることだろう。ところが偶然の出来事が2度も続いて

起こると、そういうことはまともな作品では見られないはずで、その現実感も台無しになるといわなければならない。しかも2度の偶然が、物語としては導入部と展開部の初めという、いわばそれなしでは物語の成立が危ぶまれる、プロットの要^{かなめ}のところで起こるのである。銃殺隊による死刑執行のとき、ガスパールは致命傷をまぬかれ、兵士たちに気付かれずに、折り重なる仲間の身体の下で生き延び、夜の闇にまぎれて近くの屋敷に逃げ込むのである。また、彼の生存と隠れ家が見つかり、捜索隊が逮捕に赴くと、まるでその時を待つかのように大地震が起こる。そしてガスパールは、捜索隊の震え危く將軍を助けて逮捕をまぬかれ、自分の命の恩人というべき娘を瓦礫のなかから救い出して、その後の物語が進んでいくのである。語り手の使用によって得られる物語の現実感も、繰り返される不自然さを説得する力は乏しく、それにも自ずと限度があることを警戒しなければならない。

そして語り手、サンティエラ將軍の物語に対する姿勢が、次の考察課題である。「ガスパール・ルイス」の物語は、導入部にあたるおよそ7分の1ほどが全知の立場から進められ、その後サンティエラ將軍が約50年前の自己の体験を語るかたちになっており、その間、ところどころ、全知の立場からの補足が付け加えられる。ただし、現在70歳に近い將軍の語りの姿勢が、量的に見ても、物語全体をおおうと考えてよく、それもお人好しで単純な彼の性格を反映して、昔の体験を懐かしむといった趣きに支配されている。彼のその姿勢には、例えば短編「青春」(‘Youth’, 1898)の語り手マーロウが20年前の自己の苦難に満ちた体験を熱っぽく語り、人生における青春期の意味をとらえて、たとえ「気晴らし的な」作品であっても、それを佳作にまで高めた、物語に対する情熱や、出来事の背後を見つめ人生の意味を探ろうとする、真摯な態度は見られない。サンティエラ將軍の語りには、とくに後半ですこぶる感傷的なのは別にしても、読者の感情に訴える大げさな表現が多く、いわゆる驚きや恐怖

や哀れみなどに頼りすぎる傾向が強いのである。そしてそれらも度を越すと、ただ一時的な効果は得られても、それらが結局は平凡で空しい描写となり、再読に値しない代物と化すのは少しも説明を必要としない。作家コンラッドが一般読者の人気を得ようと、いわば手っ取り早い金かせぎのために、物語として革命期の政治に男女の愛を混ぜ、表現には通俗雑誌の安価な特徴を借りた結果が、例えば「ガスパール・ルイス」のような作品になると考えて、それほど大きな間違いではないだろう。

もっとも、コンラッド自身、それらのことを意識している節がないわけではない。この作品の題名には、主人公ガスパール・ルイスの名前のほかに、「1つの浪漫的な物語」(A Romantic Tale)という説明が付けられている。また、短編集編さんを考える時に、出版社に宛てた手紙のなかの説明はいかにも弁解めいている。彼は収録作品をまとめて、次のようにいうのである。「すべての物語は事件——行動——を扱い、分析の物語ではありません。……それらは研究ではありません——問題には1つも触れていません。それらは単なる物語にすぎず、そこで私はただ興味本位のものに仕上げようと全力を尽くしたのです⁸⁾」と。そして作品「ガスパール・ルイス」の雑誌発表から15年後には、これを原作とする映画化の話が持ち上がったという⁹⁾。その題名は「怪力無双の男、ガスパール」(*Gaspar the Strong Man*)であり、おそらく物語に見られる俗受けする要素、つまり波瀾万丈で軽快なテンポの筋立て、内容的には革命期の政治とそれに振り回される人間および男女の恋愛、そしてアクションとお涙頂戴の混合などといった要素が、その大きな理由になったかと推測される。ただし、結果的には、この企画は実現しなかった。

NOTES

テキストは Joseph Conrad: *A Set of Six* (London: J. M. Dent and Sons, 1954) を使用した。後注における頁数はそれによる。

- (1) Frederick R. Karl & Laurence Davies (ed.): *The Collected Letters of Joseph Conrad*, Volume 2 (Cambridge: Cambridge U. P., 1986) p.268.
- (2) Joseph Conrad: *A Set of Six*, 'Author's Note' p.v.
- (3) *Ibid.*, pp.vi–vii.
- (4) Jocelyn Baines: *Joseph Conrad, A Critical Biography* (1960; rpt. London: Weidenfeld and Nicolson, 1967) p.322.
- (5) Joseph Conrad: *A Set of Six*, p.70.
- (6) *Ibid.*, p.19.
- (7) *Ibid.*, 'Author's Note', p.vi.
- (8) G. Jean-Aubry: *Joseph Conrad, Life & Letters*, Volume 2 (London: William Heinemann, 1927) p.66.
- (9) Norman Page: *A Conrad Companion* (London: Macmillan, 1986) p.153.